

# 木藤純子

JUNKO KIDO



1.2  
「ひるとよる」展示風景  
(2014, GALLERY CAPTION, 岐阜)  
撮影:先岡康博

1976年富山県生まれ。  
1999年成安造形大学造形学部造形美術科洋画クラス卒業。  
京都府在住。  
主な個展に「ひるとよる」  
(2014, GALLERY CAPTION, 岐阜)、  
注目作家紹介プログラム チャンネル5「Winter Bloom」  
(2014, 兵庫県立美術館、兵庫)など。  
主なグループ展に、  
「panorama—すべてを見ながら、見えていない私たちへ」  
(2010, 京都芸術センター、京都)、  
「世界制作の方法」(2011, 国立国際美術館、大阪)、  
MOTアニュアル2011  
「Nearest Faraway 世界の深さのはかり方」  
(2011, 東京都現代美術館、東京)、  
「岡崎 ART & JAZZ 2012 “親密な空間・私の記憶”」  
(2012, 岡崎市日本多忠次邸、愛知)、  
「自然学 | SHIZENGAKU 一来るべき美学のために—」  
(2012, 滋賀県立近代美術館、滋賀)、  
「NOW●JAPAN」  
(2013, KAdE, オランダ)など。



2

曾谷朝絵  
ASAE SOYA  
1977年東京都生まれ。2006年東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了にて博士(美術)取得。神奈川県在住。  
「昭和シェル石油現代美術賞」グランプリ(2001)、「VOCA賞」特別VOCA賞(グランプリ)(2002)、  
「横浜文化賞文化・芸術奨励賞」(2013)、「神奈川県文化賞・スポンサー賞」(神奈川県文化賞未来賞(2013))、  
「NYO Dot Art Community Commission」(2014)ほか、受賞多数。  
平成25年度文化庁新進芸術家在外研修員としてニューヨークに滞在。  
主な個展として「虹」(2015, AKI Gallery, 台北)、「浮かぶ」(2014, KAAAT 神奈川県芸術劇場、神奈川県)、  
「藍色(そらいろ)」(2013, 水戸芸術館、茨城)、  
「雫も色」(2010, SHISEIDO GALLERY, 東京)、「Prism」(2007, 西村画廊、東京)など多数。  
グループ展として「聯覺」(Synesthesia)(2014, AKI Gallery, 台北)、  
「Art Today 2005」(2005, セゾン現代美術館、長野)、「こもりびと」(2003, 水戸芸術館、茨城)、  
「第1回 府中ビエンナーレ-ダブルリアリティ」(2002, 府中市美術館、東京)など多数。



3



4

3 《嵐(sora)》(2013, 水戸芸術館、茨城)  
撮影:ナカサンド・パートナーズ  
4 《Splash》パブリックビューイング「浮かぶ」  
(2014, KAAAT 神奈川県芸術劇場、神奈川県)  
撮影:KAAAT 神奈川県芸術劇場

京都市立芸術大学に在籍する学生のうち、女子学生が占める割合は増加し続けていて、もはや9割に近づきつつあります。全国的に見ても、程度の差はしかし現在、女性のアーティストが顕著に増加しているわけではありません。では、芸術大学を卒業した女性たちは何を目指し、どこへ向かおうとしているのか。今夏、この問いを起点として、芸術大学を卒業した女性たちが手がけているプロジェクト「目が水面(みなも)にゆれるとき」を立ち上げます。

# 目が水面にゆれるとき

このように、本展出展作家の4人は、日常の中で見過ごしてしまいがちなものを自らの身体感覚でとらえ、それぞれの手法で作品に落としこんでいます。目だけではできない。この4人が表現するような、不可視化する要素であるはずで。「いま」の見えざる断片を展開してゆくのです。かつてパウル・クレーは「芸術の見えるようにすることである」との言葉を残しましたが、のどと言えましよう。また、国内外で広く活躍中の本プロジェクトの出展中心に、それぞれの「いま」をテーマに各種イベントを「アート」をキーワードとして、アーティストとして活動する人たちによるトークイベントなどを行います。これらの「いま」に触れることは、参加者も含めたその場に立ち会うことでそれぞれの「いま」を改めてとらえ直す機会になるのではないのでしょうか。「鏡花水月」という言葉があります。これは、鏡に映った花や、水に映った月を指す言葉ですが、転じて、目には見えながら手に取ることのできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないものを形容しています。はかない幻のたとえ、と定義されることが多いのですが、その言葉にはもっと奥深い趣があるのではないのでしょうか。本プロジェクトで取り上げる女性たち、そして現在に生きる私たちの全ては「目には見えながら手に取ることのできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないもの」と向き合いながら、それぞれの「いま」を形作っています。「水に映った月」はやがて消えてしまう幻などではなく、人それぞれの背景に密接に関わるものとなり得るのです。この、色とりどりの水面に映る月の影がゆらめくとき、日常の中で見過ごしてしまいがちだけれど、確かに存在する本質的なものに出会えるはずで。そして、その中に、未来に向きあうためのヒントを見つけることができるかもしれません。展覧会とイベントの両方とも、多くの方のご参加をお待ちしています。

生が占める割合は増加し続けていて、もはや9割はあれ、どの芸術大学にもその傾向があるようです。いるわけではありません。では、芸術大学を卒業した女性たちの「いま」をめぐる展覧会とイベントで構成を立ち上げます。谷朝絵・中村牧子・和田真由子の作品を紹介し、女性たちの「いま」をめぐり、鑑賞者の感性に訴けかけるインスタレーション作品を手がけています。解を朝絵は、日常の中にある身近なものをモチーフに発色染料で表現してきましたが、近年は平面絵画のみならずインスタレーションにもその世界を交錯」をキーワードに陶磁器作品を制作し、近年の美的感覚を、西洋のモチーフを引用しながら作品上で融合させるシリーズを手がけています。そして、和田真由子は、イメージや意識、思考といった実体を持たないものを可視化するため、形を限定しな

# 目が水面にゆれるとき

このように、本展出展作家の4人は、日常の中で見過ごしてしまいがちなものを自らの身体感覚でとらえ、それぞれの手法で作品に落としこんでいます。目だけではできない。この4人が表現するような、不可視化する要素であるはずで。「いま」の見えざる断片を展開してゆくのです。かつてパウル・クレーは「芸術の見えるようにすることである」との言葉を残しましたが、のどと言えましよう。また、国内外で広く活躍中の本プロジェクトの出展中心に、それぞれの「いま」をテーマに各種イベントを「アート」をキーワードとして、アーティストとして活動する人たちによるトークイベントなどを行います。これらの「いま」に触れることは、参加者も含めたその場に立ち会うことでそれぞれの「いま」を改めてとらえ直す機会になるのではないのでしょうか。「鏡花水月」という言葉があります。これは、鏡に映った花や、水に映った月を指す言葉ですが、転じて、目には見えながら手に取ることのできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないものを形容しています。はかない幻のたとえ、と定義されることが多いのですが、その言葉にはもっと奥深い趣があるのではないのでしょうか。本プロジェクトで取り上げる女性たち、そして現在に生きる私たちの全ては「目には見えながら手に取ることのできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないもの」と向き合いながら、それぞれの「いま」を形作っています。「水に映った月」はやがて消えてしまう幻などではなく、人それぞれの背景に密接に関わるものとなり得るのです。この、色とりどりの水面に映る月の影がゆらめくとき、日常の中で見過ごしてしまいがちだけれど、確かに存在する本質的なものに出会えるはずで。そして、その中に、未来に向きあうためのヒントを見つけることができるかもしれません。展覧会とイベントの両方とも、多くの方のご参加をお待ちしています。



# 中村牧子

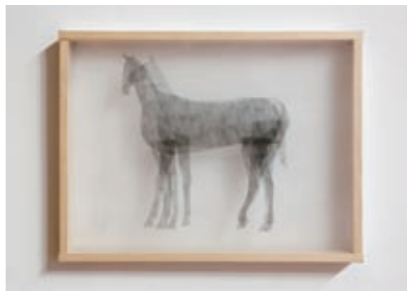
MAKIKO NAKAMURA

1982年大阪府生まれ。  
2009年京都市立芸術大学大学院美術研究科陶磁器専攻修了。  
2011年Royal College of Art(英国王立芸術大学) Ceramics&Glass科卒業。  
ドイツ在住。  
主な展覧会に「裝飾の力」(2009, 東京藝術大学美術館工芸館、東京)、  
「フシギ!たのしい!ケンダイトーゲイ」(2012, 京都市立美術館、京橋)、  
「CERAMIQUE 1」(2013, KISSTHEDESIGN GALLERY, フランス)など。  
「日常と非日常の交錯」をテーマとした陶芸作品を国内外で発表している。



5 100years after the party-plate—(2011)  
6 swan lake (2011)

7 《馬》(2011) 撮影:橋本一夫  
8 《ツバメ》(2011) Courtesy:児玉画廊



7



8

# 和田真由子

MAYUKO WADA

1985年大阪府生まれ。2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。  
大阪府在住。個展に「ヨットの習作」(2010, 児玉画廊、京都)、  
「フローイング」(2011, 児玉画廊、京都)、  
「矢のための絵」(2013, 児玉画廊 | 東京、東京)、「ファサード」(2013, 児玉画廊、京都)、  
「母親と観音」(2014, 児玉画廊、京都)、「ハムレット」(2015, 児玉画廊 | 東京、東京)。  
主なグループ展に「アル・ジャパネスク:世界の中の日本現代美術」(2012, 国立国際美術館、大阪)、  
「キュレーターからのメッセージ2012「現代絵画のいま」(2012, 兵庫県立美術館、兵庫)、  
「VOCA賞」(2013, 上野の森美術館、東京)など。